

〈史料紹介〉 出羽国置賜郡金山村菅野家旧蔵「書物覚」

小関 悠一郎

はじめに

本稿では、出羽国置賜郡金山村（現南陽市金山）の菅野かんの家旧蔵で、現在山形大学附属図書館所蔵の書籍群「菅野家関係資料」に含まれる蔵書目録「書物覚」を翻刻・紹介する。

近年、書物研究の進展によって、全国各地の蔵書史料のあり方が次々と明らかにされるようになったことは周知の通りである。しかしながら、蔵書史料の掘り起こしという基礎作業は今後も地道に蓄積を重ねていく必要があることは言うまでもない。とりわけ、近世の出羽国置賜郡―米沢藩領については、こうした作業を早急に行う

必要があると思われる。というのも、米沢藩領域における民間の蔵書については、史料的制約もあつてか、いまだ研究がほとんどなされていないというのが現状だからである。「書物覚」、および「菅野家関係資料」は、こうした空白を埋める意味で貴重な史料（群）と言える。そこで以下、菅野家について簡単に紹介し、「書物覚」の特徴について述べた上で、史料の翻刻を行うこととする。

一、菅野家について

まず、菅野家旧蔵史料群について述べておこう。「書物覚」が含まれる「菅野家関係資料」は、一九七三年、菅野家から山形大学附属図書館に収蔵されたもので、書籍

九六六冊、古文書二五冊の計九九一点からなる（山形大学附属図書館所蔵「菅野家関係資料」内部目録、同館ホームページ参照）。当時、関係者によつて三日間程度、菅野家での史料調査が行われ、学生の参考になるものが選ばれて山形大学に移されたという。この時移された書籍群はもともと、当時の当主の名（佐次兵衛〔隆助〕、菅野家第六代）をとつて「佐次兵衛文庫」と呼ばれていたものようであるが、残りの文書については現在も菅野家の蔵に収蔵されている。この文書は未見であるが、明治期の帳簿類が中心のようだという（以上は主として菅野家を訪問した際の聞き取りによる）。これらのことから、菅野家旧蔵史料は、現在「菅野家関係資料」として山形大学附属図書館に所蔵されている書籍群、および菅野家現蔵の文書群からなると言えよう。なお、金山村閩連史料としては、同村の菊地嘉七家文書があり（『南陽市史編集資料』第一三号に翻刻）、天保から嘉永にかけての土地証文等に「長百姓 菅野代助」、慶応期のものに「長百姓 菅野佐次兵衛」の名が見えている。

次に、菅野家が所在する金山村について。同村は、置賜盆地の北部、吉野川中流の山間部に位置し、置賜地方

と村山地方を結ぶ小滝街道が通っている。「上杉領村目録」では、村高一三五一石余（御届高七〇九石余）、天明二年改反別では田六五町余、畑五一町余、戸数一二七、人口七一九、漆一五、九九四本・青芋三五貫余のほか、紅花・綿などの生産が行われ、蚕利四九七両であった。漆や青芋の生産は、山間部に位置した村の特性を表している。

続いて、菅野家について。菅野家は、代々金山村の平館に居住した旧家で、初代代助（佐次兵衛）（安永九年～安政元年）以後、二代常次郎（文化五年～明治二二年）から七代常助に至り、現在のご当主隆助氏は八代目にあたる（菅野家所蔵「過去帳」等）。同家の成立は寛政期であり、比較的新興の家である。ここで菅野家の成立事情や初代代助の事跡について触れておこう。なお、以下の記述は、本稿末尾に【参考資料】として掲げた、初代代助の手になる「初代佐次兵衛夫妻肖像画賛（仮）」による（なお、この肖像画は現在も菅野家に保管されている）。併せてご参照いただきたい。さてそれによると、初代代助（以下「代助」は初代を指す）の父は菅野佐次兵衛といい、代助は次男として安永九年（一七八〇）に生まれ

た。寛政一〇年（一七九八）、代助二〇歳の時に、一族の伊兵衛の遺跡を相続して「別家」した。これが現在の菅野家の起点である。続いて文化三年（一八〇六）に「百姓の長」を命じられたとあるが、これは長百姓（百姓代にあたる）を指すものであろうか。文政八年には新たに屋敷を設け、翌九年に宮村（現長井市宮）の寺嶋氏から苗字を譲り受け、改名して菅野佐次兵衛と名乗った。以上が菅野家成立のあらましである。菅野家は、寛政一〇年の別家以来、発展を遂げた新興の百姓の家であったと推測することができよう。同家の経営については今後の検討課題としなければならないが、山林の集積・経営や酒造を営んでいたものと見受けられる。なお、菅野氏の本家（代助の生家）も代々金山村に居住して現在に至っている。

二、「書物覚」について

さて次に、「書物覚」という史料の特徴について述べておきたい。「書物覚」の形態は横半帳で二〇丁ある。表紙・裏表紙に「菅野代助」とあるように、初代代助が記し

たものとみて間違いないだろう。本文中に現れる年代の下限は文政四年であり、「菅野代助」という署名と符合する。また、他の年代も文化年間後半から文政初年にかけてであることから、本史料の成立を文政初年頃と推定しておきたい。

本史料の構成は大きく二つに分かれ、はじめに「書物覚」として書物一六三点を列記する。後半は「諸道貢附」とあるように、食器を中心とする諸道具の書き上げである。「諸道貢附」はさらに前後に分かれ、後半部には「新用意致品々」とある。

書目の一点一点には、書名以外にいくつかの事項が記されており、必ずしも一定ではないが、概ね次のような事柄が記されている。一つ書き、書名、巻数、冊数、書型、入手経緯（書写者・購入者等）、その他、である。また、各書目には、いくつかのしるしがつけられている。

□は角印で、○は丸印を示している。また、「○」は筆でつけられたしるしである。傍線は見せ消ちを表している。傍線があるものには「払二出ス」、「売へ」、「ナシ」などと記されたものが多く、「書物覚」作成時点で菅野家に所在した書物が、後に売却などによって他へ移動

したことを示している。また、傍線と「平」、「濟」はほとんど重複していない。「平」、「濟」が付けられた書目はある時点で菅野家に所在することが確認されたことを示しているものと思われる。なお、書目の上の1〜163の数字は、翻刻者が便宜的にふつたものである。

次に、書写者等について触れておこう。まず、親佐治兵衛（他に「親」、「親父」とも表記される）という名が、一七点の書目にみえている（1〜3・7・8・11・44・64・77〜80・89〜92・101）。ほとんどが自らの筆写本で（89〜92は不明）、101は座頭の語りを聞きながら書き取ったものだという。続いて代助の名が二点にみえる（3・5・6・12〜16・20〜25・28・47・52・57・67・75・133）。このうち、自ら筆写したものが二点、購入が九点となっており、購入の割合が増えている。このほかには、以下のような人名がみえている。「吾妻立澹写」（4）、「藤左衛門より貰取」（5）、「栄助」（9・10）、「寺沢書」（31・32・33）、「濱田奎之助筆」（34）、「島貫元光書」（38）、「茂助」（41・42）、「おいよ」（61）、「万太へ返す」（66）、「興助二呉、小出文治二かし」（67）、「恒次衛」（76）、「おこま」（121）、「カノ」（137）、である。菅野家関係資料一

七〇九『ひらかな盛衰記』の奥書に、「明和八卯八月十七日／米沢金山邑／菅野榮助」とあるように、これらの人物には菅野家内、あるいは一族の人物が一定数含まれているだろう。また、濱田氏や島貫氏らの名がみえていることは、菅野家外部との遣り取りによって蔵書が形成されていることを示すものと言える。以上、「書物覚」にみえる菅野家蔵書は、菅野本家佐次兵衛がその基礎を作り、それを引き継いだ代助によって大きく厚みを増していったものと言うことができる。また、この蔵書は、当主ばかりでなく、女性も含めた菅野家内・一族の人物の活動、および菅野家外部との交流によって発展していったと言える。

史料の翻刻にあたっては、できる限り正確を期したつもりであるが、翻刻者の力量不足による誤りなどもあるかもしれない。識者のご教示を仰ぎたい。

【付記】

本史料の調査にあたっては、南陽市金山の菅野隆助氏ご夫妻に大変お世話になった。記して心よりの謝意を表すも

のである。また、史料の閲覧・撮影と翻刻を許可してくだ
さった山形大学附属図書館の皆様にも厚く御礼申し上げた
い。

【史料翻刻】

※行間括弧内の記述は翻刻者による。

(表紙)

諸品附

(表紙裏)

賀美加寿安利合

普賢菩薩

平館之住

菅野代助

萬書物附留

(本文)

書物覚

- | | | |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 1 | 一、 平 義臣傳 ○ 至一ヨリ六二 三冊、 | |
| 2 | 一、 平 龍神笛 ○ 全一冊、右同断 済 | 親佐治兵衛写之 |
| 3 | 一、 平 安天間記 ○ 全二冊、右同断、同代助共写之 | |
| 4 | 一、 平 宇都宮禁清水 ○ 全二冊、吾妻立澹写 済 | |
| 5 | 一、 平 太平記 ○ <small>鈔卷共廿二冊 一ヨリ至四十二、判、</small> | |
| 6 | 一、 平 前太平記 ○ 一ヨリ五迄、書本、代助求之 済 | <small>箱入ニシテ巻末式百文、藤左衛門より買取、代助求之</small> |
| 7 | 一、 平 富士之人穴 ○ 全、親写之 済 | |
| 8 | 一、 平 俵藤太 ○ 全、 <small>右断</small> 済 | |
| 9 | 一、平家物語 一冊、書本、栄助 | |
| 10 | 一、 平 伊達秘録 ○ 一冊、" | |
| 11 | 一、 平 用心たとへ草 ○ 全一冊 済
(<small>売卜先生糠俵</small> 親父写之) | |
| 12 | 一、 平 家内用心集 ○ 三冊、代助十四才書 | |
| 13 | 一、 平 我津衛 ○ 二冊、同断 | |
| 14 | 一、 平 通俗十二朝軍談 ○ <small>一ヨリ至十四二、七冊ニシテ、</small> | |

- 15 一、午 日蓮 一、〃
- 16 一、午 湛忍記 一、〃^済
- 17 一、午 三體詩 ○ 小本一冊、判、書本一冊、
〃二冊アリ
- 18 一、論語 一冊アリ
- 19 一、孟子 卷ノ十一ヨリ十四マテ 一冊アリ
- 20 一、午 家道訓 ○ 一ヨリ至六 全三冊、判、
- 21 一、午 大和俗訓 ○ 一ヨリ至七二 全五冊、判、
代助求之^済
- 22 一、午 慶安太平記 ○ 一ヨリ至十二 全五冊、
右同断^済
- 23 一、午 野總(マ)若話 ○ 全一冊、代助写之^済
- 24 一、午 和莊兵衛 ○ 一ヨリ至四二 二冊、
右同断^済
- 25 一、午 金もふかる伝授 ○ 上下、判、代助求之^済
- 26 一、午 千家流生花 ○ 一、書本^済
- 27 一、午 濡手て粟 ○ 五冊、判^済
- 28 一、午 殿中公武論 ○ 全、代助写^済
- 29 一、午 伊勢物語 ○ 上下、判^済
- 30 一、為学初問 上下、判、弘二出ス^済
- 31 一、午 近江八詩歌 ○ 一、寺沢書
- 32 一、初学要集 一、〃書
- 33 一、書札筆用集 一、〃書
- 34 一、午 通俗用文章 一、濱田奎之助筆
- 35 一、年中用文章 一、判
- 36 一、書札筆
- 37 一、〇千字文 ○ 一、石スリ^済
- 38 一、千字文 島貫元光書、弘二出ス
- 39 一、午 義光物語 ○ 三冊、書本
- 40 一、午 大学 一
- 41 一、諷本(抹消) 二冊、小本、茂助
- 42 一、午 小うたへ本 ○ 一冊、〃
- 43 一、午 耳底記 ○ 四冊、書本、小本也
- 44 一、午 御成座敷邯鄲枕 ○ 一、親筆^済
- 45 一、午 五常 ○ 一、小本^済
- 46 一、午 唐詩選 ○ 二、〃
- 47 一、午 一休(2)禅阿弥陀物語 ○ 一、代助書
- 48 一、午 人相本 ○ 二冊、判、外二書本一、〃三^済
- 49 一、午 艶書翠(2) ○ 一、小^済

- 107 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89
- 一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
- 明和四年萬覽帳 ○ 一、親
〃 九年江戸大火を印 ○ 一、
〃
地蔵和さん ○ 一、
〃
ちんてき問答 ○ 一、
〃
新垣村〃附 ○ 上下
〃
長ふくべ ○ 一、小本
〃
和漢諸道具附 一、
〃
大小明付 一、
〃
連歌初心抄 一、
〃
御成敗式目 一
〃
膝栗毛 七編、上下
〃
八編、上下
地ぶし本 ○ 一、親筆、座頭語ルを聞な
から書給ふ
- 恋女房染万手綱 全、弘二出ス
仮名手本忠臣蔵 ○ 全
葦屋道満大目鑑 ○ 全
安倍晴明倭言葉 ○ 全
忠臣金経丹 全、弘二出ス
義経千本桜 ○ 全

- 128 127 126 125 124 123 122 121 120 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108
- 一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
- 一谷嬾軍記 ○ 〃
八百屋お七 〃、弘二出ス
天神記
三荘大夫五人娘 ○ 〃
ひらかな盛衰記 ○ 〃
写働足利染 〃、弘二出ス
彦山権現誓助剱 ○ 全
娥歌かるた 〃、弘二出ス
驪山地翼塚 ○ 〃
物草太郎 ○ 〃、書本
名歌 〃、書本
駿徳丸 ○ 〃
城木や おこま ○ 寄
富士菅笠 ○ 全
黒塚の一家 ○ 寄
ぞふり打 ○ 〃
菅原伝授 ○ 〃
白石はなし ○ 〃
伝授雲蔵 〃、ナシ
色々おとり歌よせ ○ 〃
〃
- 花吹雪富士ノ菅笠

- 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129
- 一、曾我扇八景 全、弘二出ス
 - 一、半 浄留理こふけ尊 ○ 半
 - 一、おそめ久松 ○ 寄
 - 一、田辺蔵旧事 一、ナシ
 - 一、酒造秘書 ○ 文政二卯年代助写之 済
 - 一、○ 通俗続三国志 ○ 始終迄、代老久
 - 一、半 家相本 ○ 三冊
 - 一、半 方カン ○ 二冊
 - 一、半 銘本 ○ カノ、七冊 済
 - 一、半 艶道通鑑 ○ 五冊 済
 - 一、敵討待山話 六冊、弘二出ス 済
 - 一、半 緞手摺昔木偶 五冊、弘二出ス 済
 - 一、半 庭訓往来 上下 済
 - 一、半 つれく草 ○ 五冊 済
 - 一、半 八月赤子 ○ 上下 済
 - 一、半 諸芸小鏡 ○ 五冊 済
 - 一、半 錦木 ○ 一二三 済
 - 一、半 大学 一
 - 一、半 中よふ 一

- 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148
- 一、半 論語 一
 - 一、半 孟子 一
 - 一、○ 実語教童子教
 - 一、○ 売卜先生糠俵 後篇、一文
 - 一、○ 正風遠州流插花衣番附録口伝抄 ○ 一
 - 一、○ 寺子式目 ○ 一、書本
 - 一、○ 御手本 ○ 書本
 - 一、○ 殺報転輪記 ○ 書本、五冊、売へ
 - 一、○ 越後治乱記 ○ 上下、売へ
 - 一、○ 双蝶蝶曲輪日記 ○
 - 一、○ お染久松 ○
 - 一、○ 代書用宝鑑 ○ 一
 - 一、○ 永曆大雑書 ○
 - 一、○ 長曆 ○
 - 一、○ 売買用手扣 ○ 書本
 - 一、○ 字林玉篇

諸道貢附
一、紺色の皿鉢 茂助

- 一、白の皿鉢 キツアリ、 "
- 一、六角とんぶり鉢 "
- 一、水鉢 大きつもの、左次兵衛
- 一、奈良茶碗 拾、箱入、茂助
- 一、 " 拾、品々物、 "
- 一、皿 拾貳、箱入、左次兵衛
- 一、 " 九ツ、箱入、茂助
- 一、黒の高膳 拾人前、本家作右衛門へ返ス
- 一、同色の膳 拾人前、飯鉢沓ツかけふた也
- 一、黒の椀 拾人前、小嶋へ戻ル
- 一、同色吸物椀 拾人前、古物きんふち也、箱入り、茂助
- 一、内赤の椀 拾人前、四ツ椀也、左次兵衛
- 一、同色吸物椀 拾人前、左次兵衛
- 一、朝顔のちよく 十五、茂助
- 一、ちよく 九ツ、 "
- 一、^手小皿 十八、 "
- 一、から金の火鉢 沓つ 茂助
- 一、せとの火鉢 貳つ "
- 一、から金の燭台 沓つ "
- 一、つたの手塩皿 "

- 一、屏風 片々 雲川の絵、 "
- 一、 " 唐しゝの絵、五尺、 "
- 一、黒柿の机 貳ツ、并けんたい沓つ
- 一、内沓つ 茂助
- 一、内沓つ 左次兵衛
- 一、又けんたい 同人
- 一、から金の火鉢 貳ツ、左次兵衛
- 一、^{文化三十五年}大皿鉢 沓つ、文太ヨリ求ル、代沓匁、左次兵衛
- 一、^{十五年寅年} " 沓つ 虎威ヨリ求ル、代沓朱、左次兵衛
- 一、^{十五年寅正月}皆朱膳椀 貳拾人前、鍋桶貳つ、飯鉢貳つ、しやし貳つ、
- 一、^{式膳とも二}代拾両貳匁 内拾人前茂助譲、又半分左次兵衛
- 一、吸物椀外うるみ内朱ニて 貳拾人前
- 一、外二、肴台皆朱ニて 三ツ 左次兵衛 才覚人 宮内
- 一、外二、ちん金ほりのとんぶり 沓つ 喜左衛門殿 左次兵衛

一、皆朱の太平 壺つ 三左衛門殿より屋敷ノ事ニ付世話ニ相

成候迎土産、左次兵衛

一、面々盆 三十六枚 茂助

一、くわし台 壺つ "

一、奈良茶碗 山形にて 式拾人前 箱式つへ入、
茂助へ

一、茶碗 " 式拾人前 同人

一、守信のかけ物 壺つ 左次兵衛

一、尚信のかけもの 壺つ 左次兵衛

一、鉄砲 壺つ 同人

一、たんす 壺つ 長次郎

一、小たんす 壺つ 同人

一、証文箱 壺つ 左次兵衛

一、たまもく硯箱 式つ 長次郎

一、黒の膳椀 式拾人前 飯つき式つ、へき三枚

湯桶 式つ 但シ、二ノ膳とも二

代四両也、 玉川ノ伊勢屋拵

両かへ一七 茂助ニ譲

黒の吸物椀 拾人前 箱入 左次兵衛

一、屏風 片々 屋敷権兵衛 左次兵衛

一、廿五金 ちぎ 壺本 左次兵衛

一、拾七金 同 同人

一、拾金 同 茂助

一、五俵出しの味噌桶 壺つ 左次兵衛

一、たまりぶね 壺つ 茂助

一、石風呂 壺つ 同人

一、舟秀の模もの 一 茂助

一、三両にて 五かへノ重箱 箱入ニ

一、酒おけ 壺つ

一、皿鉢 壺つ 代式朱にて 虎藏より 前二有

(裏表紙裏)

癸文化十年

商帳

閏正月吉日

(裏表紙)

羽州米澤

菅野代助

金山平館

【参考資料】「初代佐次兵衛夫妻肖像画賛（仮）」

そも予かたらち男八、代々平館に住居して、性ハ菅野、名は左次兵衛と号。予かはらちみたりあり、予ハ次の男にして、安永八ツの年已にやとる。亥の春着更七日うしの時二生れて、いとけなき名を代助とよひぬ。其後年月を経て寛政十戊午年、うからなる伊兵衛の跡を統て別家トなりぬ、其時、年ははたちにそなりぬ。其後五とせを経て享和三癸亥年、神風の伊勢のおん神にもふてぬ、其としハ二そしあまり五つなりぬ。又三とせ経て文化三丙寅年弥生、百姓の長といふことをおゝやけより命しられぬ、時ハはたちと八ツとなりぬ。天下泰平のかゝるめてたき御代二生れ出、うからやからもたへらかに住めるこそ偏に神の守らせ給ふならめと、氏神といわへ祭れる三宝荒神の宮をふたゝびあらたにたてぬる、としは文政三庚辰年にそ有ける、此ときハやよわむも老の初めの十

まり二とせになりぬ。それよりふたゝび伊勢の御神にもふてんことを思ひ立、大々講を取立、講頭と成て文政六癸未睦月の末二、玉鉾の道ひろひ出て、弥生の初神前二ミかくらをそふし、ふたゝひもふてぬ、其年四十五ツ二なりぬ。其後二とせを経て文政八乙酉年、あらたに屋敷をもふけて新家をひらく、とし四十七ツになりぬ。あくる文政九丙戌とし師走の頃、宮てふ駅の免許寺嶋の苗字を譲請、改而菅野佐次兵衛と八称、歳つもりくゝて四十才とハなりぬ。此あらましをうまこひこ二も伝へんと、我かかた、并二妻木下氏の女二して四十まり五ツなりぬ、夫妻のかた画工ミうつさして、つたなき言葉をもてミつから筆とりてかいつけぬ。

文政九丙戌年 十二月吉日

菅野佐次兵衛（花押）